

●高澤良一 第九句集 寒暑

●十月―十二月

武州金澤山彌勒院称名寺
薬わたる一匹の蟻まんじゅさげ

当山は真言律宗まんじゅさげ

まんじゅさげ菟まり咲けば墳めきぬ

もみぢして学問処の孔子木

履き癖をとやかく云はれ秋風裡

秋天下ポケット押え探しもの

栗飯の二膳目もまたうはの空

連れ立ちて屏風の裾より雁どち

烏瓜縞を装う数寄心

冬瓜をもてあましをる一家族

順ぐりにお迎えが来てめうが汁

かにかくに人は生きやう種ふくべ

解決にまだ道遠し秋の虹

人混みに巻き込まれゆく愛の羽根

近道のつもりが何ですすき原

莫蔭の上に婆を満載川施餓鬼

相撲取草履っつけ総武線

林間にたまりては干ぬ秋の水

秋の浜流木を目に収むのみ

紫蘇の実を好物として食細し

種を採る音の暫くしてゐたり

秋の灯に湯呑の絵柄廻し見ぬ

いきさつはどうでもよけれ秋の風

秋草は茎を活けるがごとくなり

婆同志お十夜の灯に濡れにくる

眊に紅ほとばしる芒かな

虫の音におっとりとまた性急と

俳諧の落穂拾いの夜は更けて

玄関に雨月の靴の匂ひして
雌日芝を抜く寄り道の手始めに
蘇鉄らのずんぐりむっくり無月かな
燈台の鉄階を霧濡らし初む
イヌビエとも相性のよきねこじやし
敗荷を見にゆくといふ酔狂な
敗荷より俳句授かるまで長居
白菊の月輪黄菊の日輪と
蜂屋柿高名なれど見たことなし
蓑虫の着たきりすずめ押し通す
待宵の湯呑をつつむ両手かな
秋草を倒せる雨の定めなき
月祀るすすき折り来し此通り
月下にて山田の案山子隙だらけ
水飲んでそれからする事無き夜長
さう思ふことのたびたび秋の風
仁丹の看板のこる野の錦
いきり立つ秋の蜂見て眼が荒れる
野ぶだうに雑多な彩を与ふ雨
その君が葉掘りとは爺むさい
文面は至れり尽くせり柚味噌のこと
うちまじるもの一つ無き蕎麦畑
蔦紅葉今市して今市の杉並木
今市のそらゆく蜻蛉権現晴れ
稲明りさし込む中や湯葉造り
温泉鬼怒川温泉は近場がよろし鳥威
山麓ロープウェイと温度差五度の早紅葉
団栗一つ供ふ湯神の御神体
山頂駅鉄鎖に止まる秋あかね
草風まだくっ着かぬ穂の若し

上昇の蜻蛉頭を振りぐんと振り
蜻蛉の流さるゝ方鷄頂山
序奥鬼怒の口の山の錦といふべかり
もみづれる山の快拳と申すべき
ああらぎの泰然柝の自若の秋
拾得の装いで来て菌狩
紅葉且つ散りて溪流走らす
村営バス揺るたび熊除け鈴鳴れり
山深くもみづるものの一変す
秋澄みて一連なりの山のいろ
村営バス朝刊下ろす露の村
履物のとり散らかつて紅葉宿
椽の実を呼び水にして椽餅売る
茸女夫淵温泉どき宿より出せる宅急便
取敢八丁の湯へず終点で降り紅葉狩
露天湯の上をくる蜻蛉にでつくわす
小流れをなせる余り温泉赤のまま
ロツジ風湯宿丸太ももみづるか
櫛とを紅葉十を数えて湯壺出づ
団体加仁湯さん今到着の紅葉宿
照葉して五體あられもなき岩湯
松のぼることたやすけれ蔦紅葉
今正にもみづる加仁湯の掛け湯浴ぶ
脱衣籠日光澤温泉えんまこおろぎ宿しけり
団栗の青きが打ちて磐の音
野葡萄の不粋紅葉も興の裡
良寛の草書さながら色葉散る
紅葉狩内助の功に報ゆべく
山漆紅葉急なり滝の前
温泉ゆに浮かむ羽虫一匹一青葉

天つ日に透けざるは無し沢黄葉
宿浴衣もみづる山に向ひ干す
日光沢しぶける岩ももみづらん
紅葉沢落石すんでのところにて
先代の苦勞咄や薄紅葉
紅葉して引湯泉質二系統
黒ぶだう閻魔の舌となりにけり
雄日芝はいつか芒になりたくて
十月の日の温み程ハムスター
十月の日の入る後部座席占め
返信の筆も鈍れる秋旱
水道の雫切る音良夜なり
七五三着くずれ直し処あり
簪やりボンや髪置迎える子
千歳飴一寸持たせて貰ひけり
野毛坂に団栗落ちて転ぶ距離
団栗落つ得たりや応と鋪道受け
百獣の王寝てばかり空つ風
十一月ホンドタヌキの空寝入り
十一月こんな日和が宜しくて
空風や鎖骨に触るゝ主治医の手
冬の鴟素寒貧とはなりにけり
又喰うてニュースとなりし月夜茸
夜なべの肩凝りゐて蟹の甲羅ほど
文化の日ふうせんとうわた活け込みて
捨聖片瀬の黄葉舞ふ中を
朝寒空「けふははつきりしませんね」
塵一つなき禅林の鴛鴦の水
烏瓜配して備前小物売
江ノ電の昔千鳥の翔ぶ砂丘

懸崖の舟型菊の五六艘

極月海ほたるの東京湾に船ごちやごちや

水鳥の行方追ひゐる鼻に風

自然薯のいやに素直な栽培物

七五三伊勢山皇太神宮気ばつてあげるお賽銭

林檎の荷解かんと鼻唄交りかな

ぶるぶるとファックス始動冬籠

ファックスの吐き出す紙の徐々に冬

町内に湯屋が健在冬の月

焼諸屋まだまだ遠しやきもきす

せいこ蟹蟹井にして唐錦

散歩途上出合ひし犬も冬着著て

空風にガサツな歩き方通す

お隣りと同じ植木屋松手入

濁り酒銘も凜々しく「美少年」

除夜詣飴玉なんぞ振る舞はれ

年の火にかざすパパの手こどもの手

晦日つごもりの風出て空の煤払ひ

竜の玉龍太語録が生きてをり

チヨウ鮫が鰐の顔して冬休

数え日を亀の正字の部首調べ

炭を焼く山が冷え込むまへの竈

冬日消ゆオコジヨのやうにすばしこく

あんかうは癖のなき魚箸伸ばす

底冷えに遇ひたる鴨の真顔かな

海鼠の句大いにうけて羽振りよき

これちようだい まつくる黒助凍てなまこ

拔書きの反古をかかえて寅彦忌

職退きて只の親爺のちゃんちゃんこ

常着にして見苦しからぬちゃんちゃんこ

毛布など一枚足して寝る夜かな
質屋の路地小走りに冬が来て
自然薯のすすきの褥取り外し
自然薯の包み方からして律義
齡取ったかな蓮根はやや苦手
吸はる牡蠣舌同類と思ひけり
鴨の陣崩してしまふさあ知らぬ
お香々こうこと酒あれば佳し桂郎忌
レモン添え外食めきぬ牡蠣フライ
牡蠣啜へこれから喉の滑り台
干蒲団取り込めといふ例のこゑ
海鼠噛むその眼返事を保留して
爛熱し泣かされましたよあんたには
大河内伝次郎くしゃみして冒頭
勢ふもの身ぬちに満ちて除夜詣